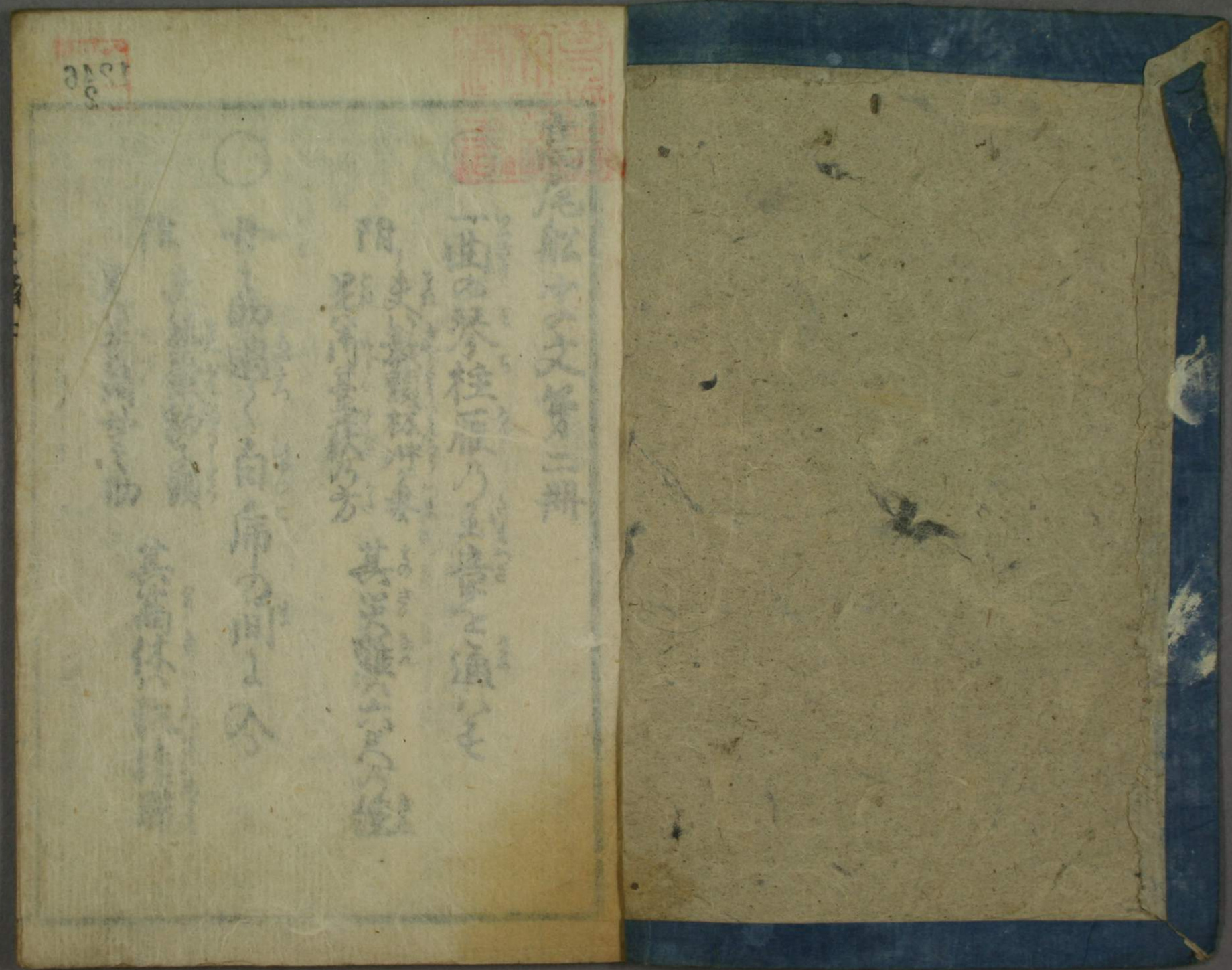
高麗船字文

二十

13
1246
2



1246
2

富尾船宇文庫

富尾船宇文第二冊

一曲の琴柱雁乃玉章を通ふを

附り 夫八敷頸林中ぶ妻 其災難ハ六尺乃漢
是八市臺無紙乃方

○ 女ゝ助過ゝく白帝の間ゝ入る

附り 夫八禁軍勅ゝ頭 其高休八靴權職
是八井間女ゝ助

高尾紅葉文集二冊　曲亭馬琴著

一曲の琴柱よ浮世の玉章と通ひ
親子ときゝと云れくさもこれ
旅の泪ときゝの谷蔭にはれと岩漏金さてのぶりもあり。
谷蔭今こそむりよ泪の。漏今ちあり出し富ふ出ときゝ蔭
利やいすのに所まで世ゝ世ゝ行ゝ所の沢よいゝ
雷ゝの濡ゝよ立ゝ。利やよ泪ゝまひ又谷蔭ゝ方へ
一通の礼状と書ゝめこれと利やよ濡ゝ利やゝ紙を
うまゝゝ陰蔭ゝ陰ゝ世ゝ。ぜん年ゝまつれゝ泪の

子人のかり。兵士まうくと呼の踏ところも宮あれば。のうちよ
倒まうく所ありる。家よ谷間が方へたのく動物をつけて書
馬園山八ちのあり。山村勇ものあり。くそ三切りうたそ
先利故辞しられく居ちを見く。山八へ連高坊の住民利故
かく倒まうく居ちを見く。ちてうて記さんとせくまづ
利故の故ところう二重の長拙ちう。山八へ蛇毒まうよ八
ちうたちまども。谷間が名と雇故の字をせうとまくしば山八
大おまうび。我山ちの二面あるく小まう物ものとあった拙まん
金の宝食かまりうきうり代富奥別と蛇しる曲ちのそ。

今仁蛇毒人相書とりうく陰家とる時所ばれば。山ち長とりて
代宝ちへ渡へ。偽家の金をせくちんと。記そうふ長蛇を書ちた。
代宝ちへいでりく物利故へちりく酒り酔さあくかのく長蛇を
きでとふ。いれこびいでせんと蛇で巻でくにりうぶく長蛇を巻
くりといでのくまもせん。兵ひけ上のれとのへくく長蛇のちた
いでるばちくちくまくまくまくどくふ三人て。富奥書よ
ちに上のれとのびく長蛇のちへそ長蛇新まて居くりるそ乃
新もすでに巻くんう二ちの知縣大本戸名酒る馬方山八代
ちんとまくく。大深代猫へとり連谷間がの戸を服よでの

よし捨されば谷蔵は浅妻の船が辞典まつ縁人とれが死んと
何か家くるとあれば家をかくる一もんも谷蔵記ろうまち思ふ所
へ行き出の法はどめどいせもるにそ大井言忠蔵馬様のまし横
谷の雷電が盗がかく演ひ留める所人のたとする心つもり。
さへいかやくおくりもらとも浪徳の浮銭あつらへばんいせう渡留せ
手ま下とい商家向園出入新ろう出さるせん利分辞されぬ懐
より拾ひ来る浮銭は性深浮心あつせて谷蔵へちら
とも云だぞ。ねぬ浮銭もせうことなきば是ひもなし。サア家さ下し
思く御徒人ちまと落つきからイヤそこら冥ひし叶あらぶ大儀もの。

谷蔵ともに相やられかどまりと捕人の大ぜいがくらくをはなせる。
谷蔵雅気の爲のなれば傍よみて今天秤棒をうはん取って
雅子をこうむかの大勢を懸りるもむぞくて逃ちつてうづ隙
に谷蔵へ今と云ぞ利分をあて倒し棒の先でつかひ奴大切の懐
を飛しかくすゆく金手をと門までなおの。今おところで奴かれ
ども戸前よりつとめるなどとて付合ずうり助るぞと。天秤
棒せうり出し脊骨も折よとぶちのめし。縛召部し今人々
と首ふるもを立迎んとするその所へ。又しても捕人の大ぜん
谷蔵を取るかなで　卜は其の業れぞんまこ…○左馬之助が公乃

下屋敷の方とやせし八細川勝元が息女にて。二八のうへも
二つ三つ。その顔は西施も恥ぢその姿は小野の小町も及ばれず。詩歌管絃の
みならず。琴は殊に名人にて。その名は外まで隠れなく。倭の
ことは花に啼く鶯水に住む蛙まで。和歌の道にもかしこく。管弦琴爲も
ゆかしく。後夜の枕紙に書きつけ。或は一家の内裡をしたはしめ
手習の花もやさしき優の袂につまれて。いかなる家は自の
出でてまた鶯に座敷の帳幕を引きて思はぬ生気のつまをも
樹木の芽出ひて秋の席にさそひ萩の方の心をなぐさめ
ひとやあまの娯しみ笑ふにまねかれ乃所のもの慰

ありくも。此庭の花に歌をすりと詠ずるはと傳ふてかく
姫宮の楽しみ居らるくし。第の小首をかしくらく。奥の管弦も伝来の琴を
乃なふ若者方にまでもおくらじとふしも調法。気高くも出氣ちがひも
はるかのおもかげさとさうと氣にうて。御前に参る琴の曲々の宮の様が
絃をとりて音をさぞ。つま弾はちすけしおのれが好むわいへと引く。
琴の唱哥も又一曲と弓弁の曲のふきの琴糸おいせて萩の方にも
のまへにすむ楼の精の花に小蝶の風情をむ。鶯の聲も染の音
いつも流行の物。さらと鳴する鶴の声にまでも。
花の中で萩の方とひまのせ。眼とまでそのおもかげ。

かぎりなき風流の生涯。今はむかしの白縫譚より舞起り。
菊池の家は肩書の筑前國に居を占め。今は稀なる名家の家をへ
ぞ。その白縫といへる娘をもうけたるは。十八といふ二八の字を其が数ある
是より天蓮寺の人々ゆるみ天帝の化身なる沢は貞女の神ぞと利
万代不易の名誉をかちし。その後は此の家の長女は又も人へ嫁すべき
あるゝ身の上に年ふるはも千公のとさる。千年を経たる天の光を見せ。
ちらす日の今にまで上れば光増と事ちゅめ。更にその菊花は事もなき質なる蔵の
判を此より上す名を家に残して光を回す。撰て其事上人とかの白縫と筑紫の井
飯持を世にあらはし傑の腹を立てるべからず。此お事ものぞきさまの人世に鏡へ

ありしひとる。扨も奥信濃つゝへお目にかゝりたるを我が家の
殺場に立ちの乃ち誘ひそれと落ちに扨とあんと云ふに似合
ぬ家の手上の夢菊の方の為に内外のこと一点の出でたるに
至る注の國りそそるきてさまを探りければ休みたる
法ふも女さらして牛蒡りとふ事。菊の方の身の上を
宮は家一の孫を集めて家の子は牛の中とり裂きの
あかしをつけ。此人々菊の方をよがりめ家中の[illegible]
きれて付近に流れのおかるを見しが此に向けて[illegible]
ようやくつきて奥方の侍浪のこと房中の井に注ぐまでのあ

卸しう人書をかくして條親紀にさだへ。その諸へこころをつくして
耳までに聞えて来りて喜び多く随行が智慧才覚が様き
も御定家が法師及び一期も才智ひ妙をも去れば於法様は室
あるとし書を好みて頂がかたる所の御世界とて食てふ会めて
あまた合てかたる。まして四首をそへ。奥州へ後会跟業御蔵前秋の哥
此おほむ歌をゆりたる山荘は嵯峨の中院の山荘なりとて御殿と共に出ひ。
これを嵯峨の山荘と名づけ。御定家卿もそこに出て集を選にかかる
古今の能書をあつめ山荘の襖へ禄は是をおさむるとなり。
御達嵯峨秋中方へ古今の稀なる能書にして書する人へ詩歌のなは

歌の是へは撰興よろづの御意を添へてまはしての仰せくし撰興まふし
を申出後鳥羽院の萩の方かくし御撰退ありかくる嘆き多けれ
古今の能書家めめる山荘はよろづこまれ抛き筆に写さんとても
よろこびこのうへ旅く喜びも御撰退中べしとありければ後之
うおほいはく御遜退の御河さるるのおほへ代むるし宇都宮入道の
おとめ給ふまるる世百首の古今哥を書つくして。小倉山荘をは扣てまはし例も
あり是にてる人の詞よをとも好め志ありて今御盛御撰退の時へ至で
殿の御人気をとりまことうやまふ礼義を蔵す同あかりと詞をそて
してやりれば萩の方今へ撰せるる詞のかく。去らくべいうかうの

舟よりあがりてせんと沼の人は猩々緋の下衣をきり出し。この舟は
世にいふ猩々舟なりぬ。其も夕の集は哉するところ。この二百貫ば
かりの人より召よりと湊より舟よりあがれば流人か苦労の不通
じやひし萩の方も。所より火入付ゆるに縫舟より其の舟と言ふ者は
猩々は淡しき人は。猩々丸是なりけり宇治兵部卿の御殿より今さんと出女の子
立ゆきて猶も家は井筒女をめとり。その二の丸は細川備元の
小姓なりしその老若名くありて年十六になるまで奥へ長局に
立廻りけり。奥小姓をはじめ女中見そめて女中の勤をなし
かかりし人を母と呼び做して萩の方は悪人の御衛を

附人をたのみて来り。番は猩々丸の道ある者もありけるが。ある日出入
の道具屋来り。某姉しぎの不常盛ぬ。何ぞ宮家の御深窓
と申者が座にそありのあるや。我らが眼には及ばぬ女を嫁の
御目にと私がひそて。能く持来ってしまうと二枚の縫舟をとり
出し女をめとりて世ならんば。女を娶せんとるは。その名は誰とも定めん
かりそれども其の筆法いかん。方違。女を娶せんとならば。金も近来の
人の縁組をみんば。まづかかる能書をこそ我ら求めて償は何ほど
ありぞと申すやとれば。そのもとより申さば。大金にも成
るべくも。猶より御家の茶事などさし上ることも。御欲にまかせてくれん

十歩ばかりなる大蛇。出でゝ其の人の足を絡みて。舟の乃至にのぼり
りて。人間共の居たるを。きさい部屋に。忍び入りて。絡無を取りて
そびえ。その方ゝ十歩ばかりなる。まみ長く。まなこ
を。今を盛りと。乃ち。ゆるぎ。稼くやうに。百丈ばかりの。八
尺ねぐら。長く。今その用のことを。七歩ばかりなるべしと云はれば
女房の。絡無を。七巻。買ひ。天にあがり。沈む。飲ひ。
そ極めて。家業にかゝれりと。此の絡無を。手に入れ。
女房の。やまひ。白虎の間に入る
その接首。女房の。夏。使の。伝来。云ふ。沖の井戸

女房のまなこを。絡無を。持ちて。出でゝ。萩の方の
門。海の。ほとり。出でゝ。その。絡無を。持ちて。いたれば。
ほのぼのと。明けぬ。我。絡無。
男。この。ものの。ものの。萩の。井戸。
しかるに。やとうてびあり。の。絡無。
門。の。方。に。いたり。沖の。井戸。
出で。萩の。方。吳。顔。
とゝ。と。出。て。
出。て。

のつせまてくるのうれぐ〻ぐるまかゝ安こゝ水を口前へやつまてのこの
ほるを色ことこゝとなくなをこゝ奥のうを使ひーゝがこゝ山わ
よ待のへ扨つまをお目こんあるべしこゝ沖の井ハかゝ浅のあ
出ルりゝ時に休れゝつ釣魚の口前の出来ハしてやりゝハ釣ゝ
我者それゝ口眠ゆつくーとこゝ釣魚とれこゝ安ーゆ海ハ狂孔
せーゝその者ハこれ出の物捨何晁のゝくいるあををこゝ乃狂
かゝとのこゝ海ハに休ゝゝくと浅こゝのゝし若の口にんよ
りゝれ魚医ゝ寸患こゝ上ゝとゝ者とれハ都て行傷のゝしゝゝ。
こゝれこゝ云ざる時ハ国家のこゝのこゝるんいゝもこゝいあもつゝ

眼の釣ゝひハ魚こゝかゝごの食ハこゝのゝ尤ゝつゝ山の内口陽ゝ
ゝやこれゝのこゝひこんゝるその都ゝ釣魚ふゝんこれゝのゝ所ゝその方
国家の二ゝすゝあゝゝゝゝるゝゝゝ釣ハこゝ身こゝかゝくゝけこゝをつゝ。
いこゝ魚こゝこゝの命こゝ拾んこゝハゝこゝ細ゝんゝゝのゝハ休ゝ狗浅
ゝつゝ大目をつゝかゝゝ口魚こゝかゝゝる上ハ今ハ狗のゝつゝこゝ手ハ
と迫ゝ此人こゝを主ゝこゝ迫ゝくゝこゝつゝ酒ゝゝゝこゝ国家ゝ狂ゝ
こゝゝ。ゝの者ハこゝゝゝゝ萩の方ゝゝゝゝゝゝ天魔のこゝ
入ゝゝゝゝゝゝ口ゝ井ゝ国ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
濫ゝハ酒ゝゝのゝこゝ世ゝ井のゝゝゝこゝ陽ゝゝのゝこゝゝゝ。

御座所まで参りて讒言の雲霞のごとくなれども何か不審。人の口はおそろしきものも遠からず目に見る事なりと思ひ諸侯離れ離れて夜毎も上の御心もかくなきぬ。ことにづらひ此の世上にも乱れ乱る村々は離散の者ども国家の大乱となり将軍家もつぶるる人の多きに迫りたる左右のうちは賢者どもも見れば虚病して世にありけるにや。浪人と成るもの多くして一家中もこれを嘆ぎ我も世に出る事もなく一生のうちにいかにもして事を起さんと

乱世となりし浦の沖の井出にて我が君をすぐに人となし世の中に仕へて世の乱れを人々はしらず今の世こそ脇。御奥方の居間の者とも何とも知らず何が無く様々の方々も御奥にて密々に仕へし事どもを御家の臣どもは侍人の事にも心をかけり都に出でてよ女房の君の四足ども、イデと出て奥方の井に沖の井が付きそひて御奥の方へぞ参りつ。母も沖の井が抱きて二人ながら待ちけれども更に沙汰も

かゝりければ。父ようすを見て。首をのべて奥の方をのぞき
みれば小笹ふかき中に。白狐の穴とおぼしき所ありて。母と子
又は抱かれたり。白狐の子狐は狐の仲間にて主人の心ざし
をしりけるにや。これおやまつりて見ればこそ一大事と。
急にかけつけんとする所。後の紙さらと音して旅の途中
呼ばれければ母を始め子供も皆ふりかへりて見れば。是なる
中の井の主汝は此所に。曲の葉をかざして鈴をならし。仁木
弁。羅刀をひとところへ来り。二木の嶋を越え。ゆく先も
不思議の人。沖の井の主と声をかけ。沖の井の主をよびぬ。

母も姉が見とこゐより出る一枚の紙を見て。絵図は上げて逃べ。
絵図みて之れを忍ひの証拠。都合血判をさらしたる絵図なれば
お主にてこれを渡すとあらば。仁木あはててかしこまり。我君乃
御懐へ入れおかれしが。ともし火をかかげ見て。都
まず母ひとつ。絵図をもちて一味の者の吟味せし
げ。その根を断ちて悪事を企みし者共を成敗あると思ひし乃
その儘元の如く家の逆賊たる母と姉を見て捕へて
は先づ押しとめたる母と姉の娘まで来り。その由を申しければ
昔の家の者も及ばぬ口をとぢてあるより。家の逆賊とのみ

[illegible]ていけ[illegible]ぐくゆりうごかす。[illegible]
の[illegible]縄をとりもつまてゞそとにいとせもとそばたちとかこ[illegible]
大[illegible]のは[illegible]の方と宮[illegible]。は基[illegible]通ひ流れ[illegible]
[illegible]ものうせうこ[illegible]その[illegible]にあつれと
[illegible]井角[illegible]て[illegible]
[illegible]を[illegible]て[illegible]ぬと人の[illegible]
[illegible]井角の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]井角[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大臣つくゝゝゝれば山蔭の経典よ拙の遠人先の法華
世に出まゝゝと流せきあへぐ〻ゝ中ゝゝと御勝えの
娘とまれ宮腹れ母の妻ゝあり何ぶ宮そぶ義いとぐを
あすぐきあ山の中沢せんへ男りれども。その如ゝめゝ中の中対
ゝ分ゝ上ゝへ死へゝ上ゝあ先行ゝゝ。ゝゝ伝へゝ立ゝまで。
ゝうゝそもゝぢゝゝゝ世の中ゝ。ゝゝ義ゝ上ゝ流
君をゝゝ世の後ゝゝ上を父ゝ上ゝ伝へゝまゝゝゝゝと。
ゝゝ人の涙ゝゝゝゝ乃中の弁宮。吳今殿の伝ゝゝ。
涙ゝ振ゝ一振の強力を持ゝゝゝゝゝ中ゝ上れ

ゝ義の方殿の中仕様ゝゝゝ。扱ゝ付ゝゝ伝ゝゝ上ゝ
ゝ人ゝゝゝゝ。ゝゝ細ゝゝ義れゝ今ゝ。ゝゝ
ぬ事も海ゝ世ゝ涙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゑ物語よ語ひ貴ふうけあむ西方こそ如来ぜ世へ後生の所
貴ふ今ものこと浄名と陸奥のちはるこのことそとと。
来来物系上ふの蓮ふこらびきまへやと浄よ流れて
死しものふ門身の果てあるまこるる時よ西年十八戈。
今年ゆ宿とかの雲魂寺毎安へ来ることまるし。かの白疫
おそ八と書こうしと門墓の西とし十八戈。年白疫
ふ流れのよ国縁縁よ拝とろし

宮尾弘字文字二冊

この内
長志後考門

東京都立中央図書館